ミンガラバー
こんにちは

認定NPO法人
日本・ミャンマー医療人育成支援協会
〒700-0815
岡山市北区野田屋町2-4-18
TEL:086-224-0102
FAX:086-221-2554
URL:http://www.mjcp.or.jp

4年間に若手医師ら68人受け入れ

ミャンマー医学教育強化プロジェクト

岡山大など6大学

岡山大を中心にした6大学の「ミャンマー医学教育強化プロジェクト」が動き始めた。将来のミャンマーの医療を担う優れた人材を育てるのがねらい。今年度から4年間に若手医師や放射線技師ら68人を受け入れ、研究や研修をしてもらう。

プロジェクトに参加する大学は岡山のほかに千葉、新潟、金沢、長崎、熊本。よく似た歴史、規模など共通点があり、連携した。ミャンマーから12人がすでに来日。2人ずつ各大学で4年間、基礎系の博士課程で学び、博士号の取得をめざす。岡山大にはマンダレー医科大とヤンゴン医科大（Ⅱ）から医師2人がやってきた。それぞれ松井秀樹教授（細胞生理学）と西堀正洋教授（薬理学）の研究室で指導を受けている。

他の56人は2週間から3カ月、6大学の臨床系で画像診断技術を習得したり、救急・麻酔技術を学んだりする。大学側からもミャンマーへ出かけてセミナーを開催し、また医療現場などを視察する。

事業費は約4億円。JICA（国際協力機構）がそのほとんどを負担する。

木股岡山大学教授に聞く

きちっとフォローします

プロジェクト推進の中核を担う岡山大の木股敬裕教授（形成外科）＝協会理事、写真＝に聞いた。□

——資金面はJICAのほぼ全面的な協力ですね。

協会の岡田茂理事長をはじめ小出典男副理事長らがかつて岡山大教授時代にミャンマー医療支援を続けられたこと。それを引き継いだ協会の活動。これらの実績が評価され、実現したのです。

——事業の最終目標は。

それはミャンマーの医療、医学の底上げです。若手医師らは帰国後、それぞれの分野で活躍するでしょう。しかし、そこにとどまらず、次の世代を育ててほしい。そのことを私たちもきちっとフォローするつもりです。

今年の「あかね基金」を受ける学生たち（帽子姿）。手前は講師＝エーヤワディ管区

5年間に100人育成

補助助産師を農村へ

西山理事　奨学制度創設

医療がほとんど行き渡らないミャンマーの農村で、母子保健看護の仕事をする補助助産師を育成しようと、協会理事の西山央子さんが奨学金制度「あかね基金」を設けた。5年間にわたって、毎年20人ずつ、計100人に支給する。

ヤンゴン西方のエーヤワディ管区といわれる地域。医師や助産師、看護師が1人もいない、いわば無医療の貧しい農村が多い。そこで優秀でも貧困のために就学をあきらめる若い女性たちに、奨学金制度によって勉強してもらい、助産師と同じ様な仕事をしてもらおうというのだ。

ミャンマーでは助産師の資格をとるには2年間、教育を受けなければならないが、補助助産師は半年研修でよい。この研修費用や宿舎代などを「あかね基金」で支給。補助助産師になった人は、出身地の村に帰って母子保健看護にあたるほか、地域にはいない医師らとの連絡役も果たす。

西山さんは3月にミャンマーに出かけ、現地で支援してくれている「国民健康財団」の人たちと共に研修施設を訪問。今年の奨学生たちの勉強の様子を見てきた。「互いに顔の見える支援をと思い立ったのがこの奨学金制度です。これからも機会があれば訪れ、親交を深めたい」と話している。

ヤンゴン郊外　寄付クリニック　2カ所完成

昨年12月急逝の八田武志さんの遺志

協会の呼びかけに応じた13・14か所目の寄付クリニックがヤンゴン郊外にでき、2月中旬、相次いで開所した。どちらも寄付したのは岡山市在住で、去年12月に90歳で急逝した会社会長、八田武志さん。遺志はミャンマー貧困地区の医療に生かされる。

「八田特別クリニック」の開所は風船を飛ばして祝った＝ヤンゴン郊外

歯科医も巡回

ヤンゴン北西部の約5万人が住む地域にあった古い診療所を建て替えた。患者は高血圧、糖尿病、上気道感染症などが多い。お産は行っていなかった。

新しい「八田施療クリニック」には医師、看護師が常駐し、新たに産室も設けた。また、歯科医師が回ってきて治療にあたるようになった。

開所式には知事と市長が出席。地域の喜びの大きさがうかがわれた。

2階は寺子屋

2008年サイクロン被害で移住した人たちが多いヤンゴン北部の貧困地区。ここの僧院の付属施設として、1階は「八田特別クリニック」、2階は教育センターの建物を寄贈した。

僧院は、インドのデリー仏教大学で博士号を取った若い僧が運営。この地域では学校に行っていない子供が多く、そんな子100人に僧は学生ボランティアとともに、寺子屋形式で一般教育をし、英語も教えている。

クリニックでは、主に子どもと老人の健康管理にあたる。月2回、ミャンマー医師会の医師たちが巡回して、検診、予防接種、健康講座を開いたりする。クリニックと勉強室には、東京の「地球元気塾」からの寄付で、新しい診察ベッド、薬品棚や勉強机、ロッカーなどが備えられた。

看護の心は共通です

岡山大学病院
看護教育・研究センター 教授
保科 英子

岡田茂先生に同行して2月に11日間、看護師の尾堂広如さん、歯科衛生士の志茂加代子さんと私の3名でミャンマーを訪問しました。旅を続けるにつれて、私たち日本にミャンマーの人たちが大きな期待を抱いていていることを実感し、途中からは、日本の看護大学を代表しているような感じになり、責任感で押しつぶされそうにもなりました。そんな中で思いを新たにしたことを綴ります。

◇

WHO（世界保健機関）の2012年の統計によると、ミャンマーの新生児死亡率26人（出生1000人対）で41位、乳児死亡率41人（同）で50位、妊産婦死亡率1・33人（2010年、妊婦1000人対）でした。日本の新生児死亡率が1人（出生1000人対）にも満たないことを考えると、まだまだ発展途上なのです。国民健康財団のタン・セイン氏も「病院での出産が増えれば、死亡率は低下する」と語っていました。都市部では、年間に3,000もお産がある病院もありますが、医師不足、助産師・看護師不足、さらにその教育指導者も不足をしている状況です。

それでも日本からの援助で、助産施設や設備が各地に設立されたり、学生の寮が新しく整備されたりしていました。協会の支援で作られた助産施設で生後3日目の赤ちゃんを抱かせてもらいました。ミャンマーの明日を担うこの命の重みを忘れないで、多くの人々の力を合わせて支えていく必要があると思いました。

旅の途中の3人。中央が保科教授

ミャンマーにはヤンゴンとマンダレーにしか看護大学がありません。日本の50年くらい前の看護教育を思い出しました。まだ高知女子大、聖路加看護大しかなかったころ、先輩たちの多くは欧米に留学し、現在の看護教育の礎を築いてくださったのです。ミャンマーから看護師を受け入れ、大学で修士・博士課程を修了してもらう。ミャンマーでの看護大学を増やし看護教育のレベルアップを図り、看護師の質を上げていく。日本の看護教育と同じ道を歩んでいく支援を、私たちもしなければと痛切に思いました。

マンダレーの看護大では、看護の博士課程を修了した教員は1人しかおらず、それは男性でした。タイで博士号をとり、同行した尾堂看護師も男性であったため、すぐメル友となって情報交換していました。ミャンマーには歯科衛生士という職業はありませんが、予防医療やチーム医療の観点からも、志茂さんのような歯科衛生士が活躍する日が遠くないことを祈ります。

訪問したいくつかの病院の中で印象に残ったのが、マンダレーから北へ行ったところにある100床ほどの地域の基幹病院です。広い土地を思う存分横に広げた病院で、とてもきれいに掃除され、整理整頓が行き渡っていました。私は「清潔なことは看護にとって大切なこと。こちらの患者さんは幸せですよ」と看護師さんらに伝えると、皆さん、とっても誇らしげな笑みを浮かべました。決して設備は十分とはいえないけど、病気の人たちが安心して安全に、安楽に過ごすことのできる場所を提供したいという思いが、病室のカーテン一つにも表れていました。環境を整えるという看護の心は共通ですね。

◇

ミャンマーで、いろんな人たちの思いが支援として受け継がれている状況を目の当たりにしました。日本人も戦後苦しい思いをした。その苦しい時期を乗り越えてきた。今度はお返しをする番だという思いが受け継がれていく――。そんなことを実感した旅でした。

ミャンマー訪問記

国際医療協力 結局は人と人

岡山大学
医学部医学科5年
川尻 智香

新ヤンゴン総合病院で教授から説明を聞く筆者（手前）

新年早々、ミャンマーでの1週間は、とても贅沢な時間でした。国際医療協力プログラムへの参加は何度か経験がありますが、その時その時で見える世界が違い、自分自身も見える世界が少しずつ広くなっていることを実感できました。

短期間で人材育成、研究協力、無償医療支援、医療実践のための物資支援、クリニック寄贈など、様々な国際医療協力の在り方を学びました。どの形であっても、海外で何かをはじめようとする時にキーとなるのがカウンターパートであり、結局は"人と人"の関係があってこそだと実感しました。

ご一緒したある先生が手術指導前日の準備の際、おっしゃった言葉がとても印象的でした。「プロフェッショナルとしてこの場に来たのだから、今ここで自分が何を求められているのかを考え、限られた環境の中で最高のパフォーマンスを発揮しなければならない」。プロとは程遠い、学生という立場ですが、この言葉、この姿勢は私も大事にしていきたいなと思いました。

ミャンマーの医学教育に触れられたことも貴重な経験になりました。日本のJICA（国際協力機構）の支援でできた新ヤンゴン総合病院の見学では一般内科の教授回診に参加し、一般病棟に加えICU（集中治療室）も見学しました。教授は、ほんの数時間見学をする私たち日本の学生に対しても、熱心に患者さんの病気や問題点を説明してくださいました。その姿にとても感銘を受けたと同時に、医療行為こそ世界共通だと感じました。また、同じアジアで医師になるミャンマーの医学生と、まだ地位や肩書のない純粋な仲間として出会えたことは、私の財産になりました。次代を担う私達が、このつながりを大切にし、今後も学生同士の交流を盛んに行うことで、学生が主体となり何かを生み出すことができるのではないかと期待しています。

ミャンマーでの1週間は本当に楽しかったです。国際医療協力の現場に身を置いた時の楽しい、好きだという感情を今後も大事にしていきたいと思います。

編集後記

東京6大学があり、旧7帝大と呼ばれたりもする。しかし、その「6大学」は初耳でした。どことどこ・・・？おとどしの秋、岡山を訪れたミャンマー保健相の歓迎会で、岡山大学首脳が6大学共同で人材育成にあたる構想を明かすのを聞いたときです▼疑問はすぐ解けました。千葉、新潟、金沢、岡山、長崎、熊本。いずれの医学部も歴史のある旧制医科大が前身です。国際医療活動をするのにふさわしい連携といえるでしょう▼プロジェクトは本格的に始動しました。協会の岡田理事長によると、やってくる若い医師らの多くは将来、間違いなくミャンマーの医学界のリーダーになる人たちだという。日本の6大学といえば、彼の国ではいずれ、岡山大などのグループを指すようになるかもしれません。少なくとも、医療関係者の間では。（西﨑）

協会だより

交流実績公開 岡山大と協定

協会は3月、岡山大学との間で「相互協力に関する協定」を結んだ。

ミャンマーとの学術研究交流については、これまで両者は協力し合ってきた。これからは、交流実績を積極的に相互公開するように努める。また、岡山大は講座や病院、研究センターなどでミャンマー医療人研修に協力する。

これで、両者の協力関係は一段と強まった。

検診の医師ら3人 岡山、倉敷で研修

マンダレーの中央女性病院に乳がん検診センターが開設され、2月17日に開所式があった。1昨年末、ヤンゴンにできたミャンマー初の乳がん検診センターと同様、こんども協会と医療経営コンサルティング会社メディヴァ（東京）、それに経産省が協力した。

検診に当たる医師2人と技師1人は今年初めに来日。1ヵ月間、岡山大学病院、岡山県健康づくり財団病院、岡山大福クリニック、セントラルクリニック伊島（以上岡山市）、倉敷成人病センター、水島協同病院（以上倉敷市）で研修を受けた。旅費や滞在費は西日本高速道路エリア・パートナーズ倶楽部から協会への寄付100万円があてられた。

理事に小丸さん

協会理事に福山通運社長、小丸成洋さん（65）が3月に就任した。小丸さんは元NHK経営委員会委員長。

事務局長に前原さん

佐藤春雄・協会事務局長が3月に退任し、後任は税理士法人・久遠代表の前原幸夫さん（59）に。佐藤さんは協会発足以来、事務局長を務めてきた。